



藤井信吾 取手市長

行政主導型から生活者起点

～今、地方に求め

◆次世代を担う子どもたちの育成

藤井 独自性のある教育というところについては、取手市は、いわゆるトカイナ力といっているんですが、都会と田舎のちよとど接点なものですから、田植えや稲刈り、芋掘りなどが体験できます。これに加えて私は、福祉的分野での実体験を子どものうちに積ませたいのです。それは、今の子どもが祖父母世代と同居していない人が多いので、若いとか、体が弱くなるとか、人間にとって避けられない成熟のプロセスを、知らずに育っているからです。

北川 基本的には大賛成です。工業社会というのは縦割りですから、その道しか知らないで、命の尊さや人間力をなかなか高める機会がありません。機械に従事・順応しやすい子どもを作ってきたんです。坂本竜馬は時代に翻弄されながらも時代で学び、いろんな人に見学をやらせた。こういう経験がこれからの成熟した社会に必要なと思うんです。もう一度、人のあり方というものを、すなわち地域の責任でその地域に合った、子どもに対する教育というものを作り上げないといけないと思いますね。



将来のまちづくりについて熱く語り合う

◆創意工夫により仕事をを行う

藤井 子どもを育てながら親業を身に付けるということかなと思っています。

北川 家庭教育というのは親が子を教えるときよく言うでしょ。今は、パソコンもお父さんが教えられないから子どもから教えてもらおう、社会が変化してきています。工業社会で機械に使われやすい人を育てる縦割りの教育体系だけで本当に良いのか、問題提起するだけでも教育が多様化して良いと思いますね。



豊かな自然の中、親子で稲刈り体験

藤井 今、地方では国の縦割り行政を超えた現実的解決方法が本場に求められています。例えば公共下水道の終末処理場が今使わなくなった場所を途中で他目的に転用しようとする補助金を返還しないと使えません。固定的制度により塩漬けになっているものが結構あります。そういう中で、「自分たちでできることは自分たちで」と働きかけています。ひとつの事例としては、ある地域の公園の柵が腐食して取り替えるという話があります。私は材料費だけ計上して一緒に地元の人作業に参加してもらえよう、市の公園担当課と話をしています。「何とか工夫していかないと」との思いが強まるばかりです。

北川 今までどおり現状を追認しながら努力していくというのは、市役所の人は

まじめだからやってきたんですね。これを事実前提の経営といいます。だから去年よりは1割良くしようとかね、そういう努力はする。これ日常の努力です。マネジストで書かれることとか市長の想いは、価値前提であることが必要です。事実前提ではないですよ。市役所の職員は、秩序を守ることが本来の仕事だから改革できないんですよ。だから市民との契約において市役所は事実前提から価値前提に変わらなないと、永遠に変わっていかないと。これをぜひ理解してほしい。私も県庁職員に繰り返し言ったことです。

藤井 後はやりがいの面です。成功の体験です。自分がやったことよって成果を出したということを感じてもらって、生き生きとした感動の連鎖というところには何とか持っていきたい

まさやす 北川正恭氏プロフィール

1944年三重県生まれ。
早稲田大学卒業後、1972年三重県議会議員当選(3期連続)、1983年衆議院議員当選(4期連続)、1995年三重県知事に立候補し当選(2期)。
ゼロベースで事業を評価し改革を進める「事務事業評価システム」の導入や情報公開を積極的に進め、地方分権の旗手として活動。
達成目標、手段、財源を住民に約束する「マニフェスト」を提言。
現在、早稲田大学大学院公共経営研究科教授、早稲田大学マニフェスト研究所所長、「新しい日本をつくる国民会議」(21世紀臨調)代表。

いと思うんです。今、財政状況が悪くなった中で、市役所では、あれはできない、これはできない、職員はいるのに事業費がつかず、仕事ができないということが生じている。お金が無いなりにちゃんとダイナミックな仕事ができるんだという実例を積んでいかないとけないと考えています。

北川 市役所の論理では、予算は事業をするための最初の経費だと考えていて、順次予算確保への枠を取ろうと考えます。この事業をやるためにはこれだけなければいけない。これは事実前提ですよ。違うんですよ。最初に1千万円しかなかったら、1千万円でその効果を上げろということになるのが本来の予算なんですよ。だからまったく作り方が違う。人がいるから予算がつく、予算があるから仕事を探すという事実前提ではダメ。藤井市長には相応張っていたらいい、価値前提というところに立ち位置を変えてどう考えるか、とい



第3回市長室公開(12月)の様子

うところをしつかりとさせて、地方分権時代の経営に臨んでもらいたいですね。そういうことを真剣に考えることが、実は市民にとってすばらしいことだし、市民満足、顧客満足と職員満足ということがイコールになるということ、ぜひ民間経営経験者の藤井市長から職員にも理解させて欲しいなと思います。

北川 志を同じくする者同士で、生活者起点の自治体経営を一緒に進めていきたいと思います。

藤井 今日はどうもありがとうございました。